

地誌および地理学の意義の再考と 『大地の遺産』のアウトプットに関する提案

長谷川 直子・大八木 英夫・谷口 智雅

I はじめに

筆者らは、現在、日本地理学会の『大地の遺産』百選選定（目代ほか2010）に水分野の研究者の立場から関わっている（長谷川ら2013）。『大地の遺産』を選定することを通じて、日本地理学会は何を目指すのか。今回我々は『大地の遺産』を選定するにあたり、改めて、社会における地理学ならびに地誌の普及の意義について考えてみたい。なお、ここでいう地誌とは、ある地域について、地理学的な見地から人文、自然両面にわたる各現象間の関連性を説明してその土地のことを理解することと考える。

II 地理学の原点が今見直されている

もともと、地理学はまだ十分に理解されていない土地のことを“総合的に”調べ、記述することから発展して来た。それが旅行記や地図となり、地政学にもつながっている。このような時代にはある地域で起こっている様々な現象を有機的につなげて理解されてきた。例えば気候と植生の関係や水源と産業の関係など、単にそれぞれの現象の記載に留まらず、因果関係を含めて地域の事象を幅広く捉えてきた。地球上の空間は有限であり、ある程度のこと調べられると、今度は系統地理学と言って分野ごとの発展を見せる。多くの学問分野が細分化され、その分野のみに特化して他分野との交流がないことと同様の傾向である。他とのむすびつきを含めて地域を理解しようとしているものの、特定の事象を取り上げる系統地理学の各分野は総合学とは言い難い。残念ながら現在では、人文地理学と自然地理学の間では交流が少なく、また自然地理学の各分野においても分野が異なれば分科会も別に行われていることが多いのが実状である。かつて西川（2002）は『日本観と自然環境 風土ロジューへの道』の巻頭言のなかで、地球環境問題に対する地理学者の関与の遅れた原因として「自然科

学と人文・社会科学との二元論的峻別によってもたらされる文理分離主義の弊害によって、自然地理学と人文地理学との協力関係が希薄化した。しかし、その欠陥を克服するための具体的な方策と努力はまだ不十分である」と述べている。地理学を学んだ者であれば、系統地理学の一分野に根ざしてはいても“総合的に”見て考える視点を持っていることが多いだろう。しかし、地理学者であってもそういう視点が無い人もいるであろうし、他分野の人でも総合的に見る視点を持った人が沢山いるのも事実である。では地理学ならではの特徴とは果たして何か。

2012年12月に起こった中央道笹子トンネル天井崩落事故を取り上げたNHK「クローズアップ現代」（2012年12月3日（木）放送）の中で、そのトンネルの建設に関わった研究者は以下のようなことを述べていた。「私はトンネル本体の専門家であり、それについての耐久性は理解しているが、天井板については自分の担当ではなかった。おそらく、全体を見て、判断できる人がいなかったのだらうということ今反省している」。このような例は中央道笹子トンネルに限らず、枚挙にいとまがない。社会やシステムが複雑になればなるほど全体を理解できる人がなくなって予想もつかない問題が起こることがある。そこで最近では、専門性だけでなく広い視点で物事を理解できる「T字型人間」の育成など、全体を見る目の重要性が認識され始めている。同様の動きが東日本大震災3.11後の日本学術会議の取り組みとして現れている（広渡2012）。先に挙げたトンネル崩落事故についても、トンネル本体の専門家はトンネルを含む環境全体について判断する能力を持ち合わせていない可能性がある。また、科学技術が社会の中で大きな位置を占めるようになり、新たな問題を引き起こしたり、一部の専門家集団では問題を解決できない事態も生じている。小林(2007)はこれをトランス・サイエンス的状况と呼んでいる。

日本学術会議の動きは、地理学の本来の性質である「ある場所を総合的に理解する」の考え方が改めて見直されているのだとも考えられる。長谷川(2009)では、養老孟司が地理学的重要性を説いていること(養老・竹村2008)、ならびに地理的総合的な視点が環境教育に役立つことを指摘した。研究は今までに知られていないことや分からないことを明らかにすることによって評価されるため、その内容がどんなに社会的な貢献度が小さくても、今までにやられていないものであれば学術的にはオリジナルな研究として評価される。しかし、いくら重箱の隅をつつくようなことを明らかにしても、世の中で起こっていることを理解し社会を良くする助けにならないのではないか。また、そのような研究は社会から必要とされているのだろうか。直接的な社会貢献のみが研究を行うことの意義・目的とは言えない。が、現代社会において人間と自然、環境と開発の関係が叫ばれている中で、長期的な展望に立ち、人間活動を中心に置きながらも環境生態システムの維持と持続可能な地域の繁栄・活性化を考慮することは不可欠である。広渡(2012)でいうところの、「社会のための学術」か「学術のための学術」か、である。

東日本大震災を受けて、多くの研究者は研究者としての存在意義を考えたと思う。震災復興に対して専門家の立場として直接的に貢献できる研究者はそれまでの研究蓄積の分野を考えると多くはないだろう。しかしある特定の専門分野に限らず、広く浅く物事の関連性を知ること全体を見渡す能力を多くの人に身につけてもらうための地理及び地誌の普及については、地理学者であれば貢献できるはずである。そしてこのような地道な努力が、現在のトランス・サイエンス的状況の社会を遠回りでも良くすることにつながるのではないか。

このような現状と問題意識にたち、筆者らは改めて、広い視点で物事を捉えられる地理的視点及び地誌を一般に普及させることが必要であると考えている。そのためにも総合的なもの見方や地理学的重要性について、地理学者並びに学会が声を上げる時である。また、それは可能であるし今手を打たねばならないと考えている。そして、現在選定しようとしている『大地の遺産』はそれに大きな役割を果たす可能性があると考えている。

III アウトプットの重要性

日本地理学会の『大地の遺産』選定に先だって、日本地質学会では『日本の地質百選』が選定された。この選定は社会的にどれだけのインパクトがあっただろうか。

地理学は、幸いなことに、まだ、初等・中等教育に科目が存在している。しかしこれも年々軽視されている傾向に

ある。これ以上地理のプレゼンスがなくなる前にここで何かしらの社会的インパクトのある成果を出し、地理学的重要性を一般に広く理解してもらう必要があると考える。

『大地の遺産』はうまくすればその材料となりうると考えている。なぜなら、地理学は人文・社会から自然の総合的な事象を幅広く扱うため、ある地域を理解するときに断片的にならないからである。地質や大気に限定すればその視点しか学べないが、地理学には人文・社会を含め地球上で起こっている事象すべてを入れることが可能である。

これまでの議論に基づけば、『大地の遺産』の効果的なアウトプットは、地理学会にとっても、社会にとっても重要なことと考えられる。

そこで筆者らは『大地の遺産』に関する社会的なインパクトのあるアウトプットとして、教材と旅行ガイドブックを提案したい。以下に詳細に述べる。

IV 『大地の遺産』の選定

筆者らの考える『大地の遺産』とは、単一現象のジオスポットの列挙ではなく、ある空間的広がりを持った、ジオスポットの集合体である(谷口ほか2013)。イメージとしては、2012年日本地理学会春季学術大会で行われたシンポジウム「大地の遺産-地理学からの提案」での岩田(2012)の提案に近いものと捉えている。地理学者に対しては、2泊3日程度で回る巡検の範囲と説明するとわかりやすいだろうか。自然地理や地学の専門家に対しては、築地書館刊行の『日曜の地学』シリーズやコロナ社刊行の『地学のガイド』の地理版と説明するとわかりやすいだろうか。

例えば、長野県諏訪地域を例にとると、八ヶ岳の麓にある比較的標高の高い盆地という「地形」的条件で、内陸性の気候の特徴を持つため浅い諏訪湖は冬季に結氷し御神渡りという「水文・気象」現象が見られ、これが信仰の対象となって諏訪信仰という、「社会」現象を生み出している。また、乾燥した冬の厳しい寒さは寒天作りを可能にした。背後にそびえる霧ヶ峰から伏流する良質で豊富な「水」資源を有するため、精密機械工業とそれを支える中小企業の「産業」が集積する要因となっている。そのため、諏訪地域は日本アルプスの「景観」と合わせて東洋のスイスと呼ばれている。さらに、良質な水は酒造の集積と醸造業(酒・味噌)を発展させ、最近ではみそ天井が諏訪の名物となっている。フォッサマグナ上に位置するため温泉も湧いており、特に、かつては日本で一番高い約50mを吹き上げていたと言われる間欠泉も観光資源となっている。中山道と甲州街道の交点は下諏訪宿という温泉街であり、そこには諏訪大社下社がある。その横には特産の寒天を使った塩羊羹の名店がある。以上のように、この地域では諏訪湖

- 温泉- 霧ヶ峰を中心にした自然現象と、それに基づいた諏訪大社をはじめとする文化資源が組み合わせられ、特有の経済・社会・文化・観光地帯が作られている。

一般の旅行ガイドブックはこれらの現象・スポットが単に羅列してあり、その関係性が説明されていない。しかしながら、「なぜ諏訪の狭い地域に酒蔵が密集しているのか」を霧ヶ峰の伏流水の関係から理解してお酒を飲めば、そのお酒の味を殊更美味しく感じないだろうか？また、このお酒の水を作り出している霧ヶ峰にも行ってみたいという気を起こさせないだろうか？このような説明が出来るのは、地誌を有する地理学ではないかと考えている。

V 学校の副教材

義務教育における身近な地域の学習において、自分の住む地域にある『大地の遺産』を学ぶことで、その地域を総合的に理解することができると思う。これは身近な地域の学習に留まらず、幅広く且つ様々な現象をむすびつけて捉える総合的な学習にもふさわしい。長谷川(2009)で述べられているが、初等・中等教育の教員は必ずしも地理学関連組織で地理学を学んでいるとは限らず、地理学的な視点を持っている訳ではない。また、このような広い視点をカバーするだけの授業の準備には時間がかかるため、現実的にはやりたくても実現できていない場合もある。そこで、レベル別に理解できる内容の地域毎の地誌的説明(人文・自然現象を幅広く)記載した副教材を日本地理学会編として準備する。このことで、現場教員の負担をなるべく少なくして、かつ教員にも地理的センスを養ってもらい、ひいては子供たちにも地理の面白さを理解してもらえないだろうか。目標としては、1県について1冊でまとめる形で各都道府県別の副教材が作れたら良いと考えている。作成にあたっては各都道府県にいる地理学者や高校の地理(専門)教員が中心となって作り上げてはどうかと考えている。最終的なレベル別教材を作るときには教育現場の教員と一緒に作り上げることになるだろう。

VI 大人の知的旅行ガイド

地理学で行われる巡検というものは、一般的に行われている旅行に地理的・地誌的説明を付け加えたものと言えるだろう。単に訪問するだけでなく、なぜそれがその場所にあるのかの理由を理解した上で、現象と現象を結びつけて理解するということをくり返している。このような説明のある旅行ガイドがあっても良いのではないだろうか。一般に売られている旅行ガイドは、それぞれの地域ごとに、そのスポットの説明が羅列されているだけで、なぜそのスポットがその場所にあるのか、あるスポットと別のスポット

(あるいは食べ物であったり特産品であったり)がどのように関係しているのかという説明がほとんど無い。これらの説明を付け加えることで、単なるグルメやスポットの訪問以上の知的好奇心を満足させる旅行が出来るのではないだろうか。そこで筆者らはこのガイドブックを『大人の知的旅行ガイド』と名付けた。前述の学校での教材が子供向けの地誌教材であるとするれば、こちらは大人向けの地誌教材と言えるだろう。どちらも、その地域の事象を幅広く知ることによってその場所に行ってみたくなる欲求を喚起することになるであろう。それは、取り上げられた地域にとっては地域おこしや地域の活性化につながるメリットがある。作成にあたっては、地元の人しか知らないスポットや歴史等も含めて常に改訂を加えていけたらと考えている。最近、地域おこしといえばB級グルメの開発といった風潮があるが、旅行者にとっても、B級グルメを食べるだけよりは他のものと組み合わせることでその地域を訪れたいのではないだろうか。また、地元にとっても、単なるB級グルメよりも、地域の連結的な振興につながるのも、メリットが大きいのではないかと。実際にB級グルメだけでは地域おこしが成功していない事例も見られ、そのようなB級グルメも、その地域に根ざした意味付けが与えられて理解できれば、振興の可能性も広がるし、食べる側もより楽しく食べられる。先に紹介した海のない諏訪で寒天が作られている理由に納得しながら塩羊羹やところてんを食べるとこの地域でこれらを食する価値を見いだせるであろう。

このようなガイドブックは旅行者にとって有用だけではなく、旅行者を受け入れる地域にとっても意味があるものだと考える。

VI さいごに

今回、『大地の遺産』の選定後のアウトプットについて考えるところから出発し、もう少し広い視点で地理や地誌の視点をいかに社会に広めて行くかについて述べてきた。しかし、本稿で提案しているアウトプットは、『大地の遺産』で選定される百選にこだわらずもっと幅広く行うことも可能だとも考えている。最終的には、学校教材については都道府県別の教材47冊(さらに学年別に分化)、大人の向けの地誌教材はJTBパブリッシングが刊行している『るぶ』や昭文社が刊行している『まっぷる』のように、都道府県別・地域別の知的旅行ガイドを、日本地理学会編として出版社とタイアップするなどして出版出来ればと考えている。その第一段階として筆者らはまずモデル地域の一つを選定し、そこでの教材・ガイド作成とその普及、効果の検証から始めたいと考えている。最終目標の全国を網羅した教材の作成は我々だけでは手に負えないので多くの

地理学者の協力が必要だと考えている。

文献

岩田修二 2012. 大地の遺産-地理学からの提案-. 日本地理学会発表要旨集 83. 14.

小林傳司2007. 『トランス・サイエンスの時代』NTT出版.

谷口智雅・長谷川直子・大八木英夫・宮岡邦任2013. 陸水に関わる『大地の遺産』の選定. 陸の水 (*Limnology in Tokai Region of Japan*) 印刷中

西川 治2002. 『日本観と自然環境 風土ロジーへの道』暁印書館.

長谷川直子 2009. 大学における環境教育と地理教育の連携に関する一感想. お茶の水地理49. 20-26.

長谷川直子・大八木英夫・谷口智雅2013水の視点で捉えた大地の遺産選定とアウトプットの提案. 日本地理学会発表要旨集83: 54.

広渡 清吾2012. 『学者にできることは何か-日本学術会議のとり

くみを通して- (叢書 震災と社会)』岩波書店.

目代邦康・渡辺真人・堀 信行・中井達郎・河本大地・尾方隆幸・岩田修二・松本 淳 2010. ジオパークと大地の遺産百選. *E-journal GEO* 5 : 56-62.

養老孟司・竹村広太郎2008. 『本質を見抜く力- 環境・食料・エネルギー-』PHP研究所.

はせがわ・なおこ

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

おおやぎ・ひでお

日本大学文理学部地球システム学科

たにぐち・ともまさ

三重大学人文学部文化学科

A suggestion for output concerning Geo-heritage based on a re-consideration of the significances of geography and regional geography

HASEGAWA Naoko, Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

OYAGI Hideo, College of Humanities and Sciences, Nihon University

TANIGUCHI Tomomasa, Faculty of Humanities, Law and Economics, Mie University